ふるさと安曇野
きのうきょうあした

No.4　2009.10.24

安曇野の屋根を彩ったいぶし銀の造形
瓦の美と技と心

安曇野市指定有形文化財　有明山神社手水舎　　菊水、竹に虎などの造形を見ることができる。

光城山や長峰山から安曇野の田園風景を眺(なが)めると、いろいろな建物のいろいろな屋根が目に入ってきます。いぶし銀に輝く瓦屋根もその一つです。

言うまでもなく、瓦は、屋根に葺(ふ)かれ建物を雨から護(まも)っています。安曇野では、明科廃寺(あかしなはいじ)（明科）の建物に葺かれたり上ノ山窯群(うえのやまかまぐん)（豊科）で生産されるなど、既に古代から瓦の文化を認めることができます。また、近代には川手地域を中心に瓦産業が栄えました。

住宅事情の変化により、最近では瓦屋根を葺くことも減ってきていますが、それでも瓦は私たちにとって身近な存在です。一方で、そのためにあまり注意されてこなかったとも言えるのではないでしょうか。

実用的な瓦ですが、よく見るとさまざまな種類があり形があります。さらに、さまざまな願いが込められていることもわかります。いぶし銀に輝く瓦はまさに渋くて味わいのある造形(ぞうけい)なのです。

瓦について、いつもと違った角度から眺(なが)めてみませんか。きっと、新たな発見があるはずです。

◆◆瓦の歴史◆◆

瓦の発明と伝来　瓦が発明されたのは、今から3,000年以上も前のこととされています。中国では3,000年前の、ヨーロッパでは2,000年前の瓦が発掘されています。

中国から朝鮮半島を経て日本に伝わったのは、『日本書紀』によれば、崇峻元年（588）、飛鳥寺創建に伴ってのことでした。その後、日本の瓦の歴史は仏教の興隆とともに発展してきました。奈良や京都の寺院では、千数百年の時を経て、今でも当時葺かれた瓦を見ることができます。

瓦の普及　瓦は、昔は寺院や役所さらにお城など限られた建物にのみ使われていました。広く一般家庭に普及したのは、江戸時代も終わり近くなってからと言われています。それまで家屋の屋根は板葺きが一般的でしたが、それに取って代わったのが、火に強く延焼を防ぐことができた瓦でした。

やがて、瓦葺き建物の増加に伴い各地で瓦産業が発展し、三州（三河国：愛知県東部）など特産地も出現します。

近年では、住宅事情の変化や屋根の軽量化志向などにより、瓦を葺くことが減ってきています。それでも私たちにとって、瓦屋根はなじみ深いものではないでしょうか。

◆◆安曇野の瓦産業◆◆

生産の始まり　松本近郊での瓦生産は江戸時代の万治元年（1658）に、松本藩主水野忠職が、三州から瓦職人を呼び、現在の松本市岡田水汲に窯２基を設け天主及び門の瓦を製造させたのが始まりと言われています。

安曇野市指定有形文化財　松本城大手門

瓦生産の発展　その後、需要の増加もあって、粘土と燃料材の松葉や薪が得られる地域で生産が盛んになります。明治30年には、現在安曇野市の上川手村、中川手村、東川手村を含む東筑摩郡が長野県第一の多産地となりますが、中でも上川手村の生産量は際立っていました。

市町村名	額（円）	市町村名	額（円）	市町村名	額（円）
松本市	7,025	中山村	2,300	本城村	285
塩尻町	1,105	里山辺村	18,777	中川村	1,200
片丘村	50	会田村	2,000	麻績村	850
山形村	1,689	**中川手村**	**1,188**	本郷村	2,969
和田村	1,110	**東川手村**	**2,801**	岡田村	1,650
神林村	2,812	**上川手村**	**20,350**	広丘村	400

昭和９年の市町村別の瓦生産額
（『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』より）

戦後は、復興による住宅需要の増加に伴い、瓦生産も盛んになります。昭和20年代後半からは、プレス機や真空式土練機など製造工程の機械化も進み、量産されました。また、窯の燃料も薪からガスや灯油に変わりました。

こうして発展してきた安曇野の瓦産業も、技術力と豊富な資源・資本により大量生産された三州瓦が流通するようになったこと、焼成時の黒煙が敬遠されるようになったことなどによって、昭和30年代後半以降、大きく変化することとなります。とりわけ、品質が一定で電話一本で届く三州瓦の流通によって、この地域の瓦製造業者の多くは瓦屋根の施工業へと転換していきました。今では、この地で瓦を製造することはありません。

コラム①　増澤長次郎頌徳碑

この頌徳碑は、安曇野市豊科田沢（もと上川手村）の瓦店の一角に佇んでいます。

田沢は江戸時代後期の天保年間から製瓦が行われ、最盛期には９軒11基の窯があったと言います。増澤長次郎は、多くの瓦職人を育てこの地の繁栄の基礎を築いた人物で、有明山神社拝殿大献額にも、建築に携わった職工の一人として「上川手村瓦師 増澤長次郎」と名前を残しています。

この頌徳碑は、大正15年11月に、弟子たち40数人が長次郎氏を称えて建てたものです。弟子の中には、三州や甲州（山梨県）から瓦作りを学びに来た人たちもいたようです。

増澤長次郎頌徳碑

◆◆古代の瓦◆◆

明科廃寺の瓦　明科廃寺は、明科中川手に発見された長野県下でも最も古い寺院の一つです。今までに、礫を敷き詰めた遺構や建物跡などとともに数多くの瓦が発見されており、その特徴や一緒に出土した土器から、７世紀後半には瓦葺の建物があったと考えられています。瓦の中には、建物の大棟の両端を飾った鴟尾もありました。

明科廃寺の瓦は犀川の対岸七貴塩川原に発見された桜坂窯で焼かれたことが明らかになっています。

明科廃寺発掘調査風景　建物の柱穴が四角く並ぶ

古代の瓦　古代の瓦は、近現代の桟瓦と違って、丸瓦と平瓦を組み合わせて葺きます。

軒先に葺かれる軒丸瓦の瓦当（先端）文様は蓮の花（蓮弁）を表しており、その特徴によって、時期や系譜を知る手がかりが得られます。平瓦凹面の布目は、成型の際、型からはがれやすくするために被せていた布の痕が残ったものです。こうしたことから、古代の瓦はしばしば「布目瓦」とも呼ばれます。

明科廃寺出土の瓦当　明科廃寺で出土した軒丸瓦の瓦当には、花弁が８枚からなるものと12枚からなるものなどがありました。飛騨（岐阜県）の太江遺跡（寿楽寺廃寺）、甲斐（山梨県）の天狗沢瓦窯出土の瓦当と共通した特徴があることから、東山道を経由した工人の系譜をうかがい知ることができます。

明科廃寺出土の軒丸瓦

上ノ山窯群出土の瓦　豊科田沢の山中に位置する上ノ山窯群は、奈良・平安時代に操業された長野県下有数の窯群です。1987年に行われた発掘調査では、須恵器という土器を焼いた窯が17基、工人らが住んだ竪穴建物（住居・工房）が25棟発見されています。

上ノ山窯群の須恵器窯跡（上ノ山07地区１号窯）

瓦は、窯の下方に広がる灰原（失敗品や炭などを掻き出した場所）から出土しており、須恵器とともに窯で焼かれていたことがわかります。量が限られていることから、補修用などの需要に応じて、少量の生産が行われていたと考えられています。また、竪穴建物に構えられたカマドの構築材として使われていた例もありました。

出土した瓦の中には、土器作りと同じように粘土紐を巻き上げて作ったものや、瓦当の文様の型である瓦当笵もありました。

上ノ山窯群出土の瓦

コラム②　上ノ山窯群出土の陶製瓦当笵

日本では瓦当に木目が残った例があることなどから、瓦当笵は木製が一般的と考えられています。実際に、陶製の出土例も、上ノ山窯群と千葉県コジヤ遺跡、大阪府新堂廃寺、鳥取県大御堂廃寺出土のわずか４点にすぎません。しかし、朝鮮半島では陶製瓦当笵が一般的で、数多くの出土例があります。

上ノ山窯群で瓦作りをした工人の中には朝鮮半島からの渡来系の工人が含まれていたのかもしれません。

上ノ山窯群出土の瓦当笵

◆◆安曇野の屋根を彩るいぶし銀の造形◆◆

鯱（しゃち）と龍水（りゅうすい）

雲水（うんすい）

獅子（しし）

〒

浦島太郎（うらしまたろう）

大黒（だいこく）

七福神の一。食物・財福をつかさどる神。頭巾をかぶり、左肩に大きな袋を背負い、右手に打出の小槌を持ち、米俵に乗っている。

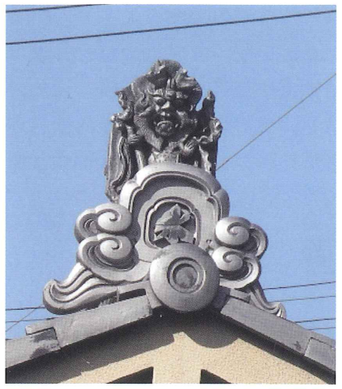
恵比寿（えびす）

七福神の一。漁業の神、商売繁盛の神。風折烏帽子をかぶり、鯛を釣り上げた姿をしている。

コラム③　いろいろな瓦

一口に瓦といっても、さまざまな形や種類があります。名前だけ紹介しても、桟瓦、平瓦、軒瓦、袖瓦、角瓦、隅瓦、掛瓦、巴瓦、棟瓦、棟止瓦、曲り瓦、熨斗瓦、面戸瓦、棟込瓦、甍瓦、山号瓦、鳥衾、谷瓦、窓瓦、板塀瓦、塀瓦などとあり、さらに鬼瓦の類に限っても、鬼瓦、獅子口、鴟尾、露盤、鯱、立物、留蓋、飾り瓦、鬼台など多種多様です。また、いわゆる日本的な瓦の他にも、スパニッシュ型、フランス型、S型などと呼ばれるものもあります。

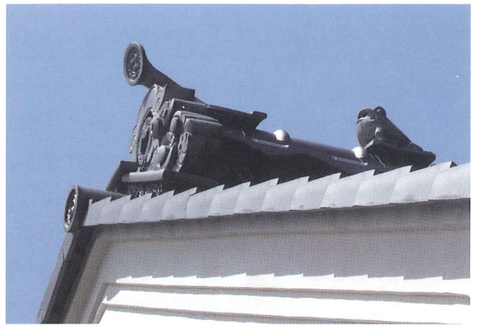
焼成法によっては、燻し瓦の他に、セメント瓦、塩焼瓦、釉薬瓦などと分類できます。



鍾馗（しょうき）

邪気を退け魔を除くという神で、中国唐代の故事に基く。髯面でにらむような大きな目を持ち、官衣をまとい右手に剣を持つ。学業成就にも効があるとされ、端午の節句などに絵や人形を奉納する地域もある。

天女（てんにょ）



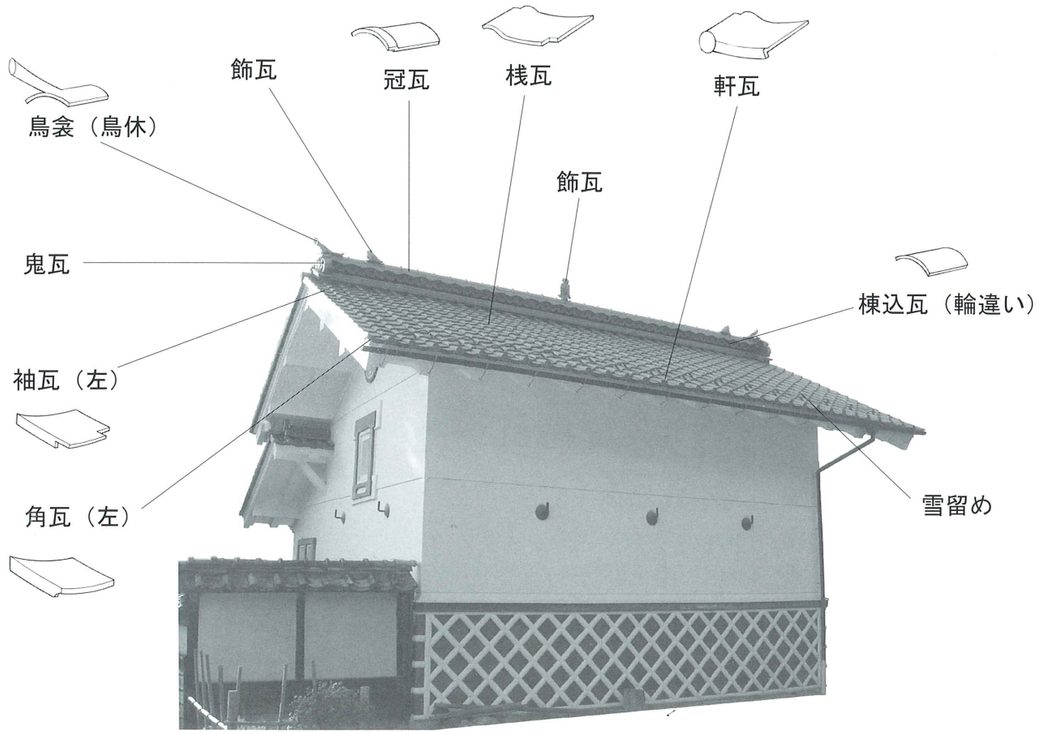
蛙（かえる）

龍（りゅう）

鳩（はと）

鶴（つる）

亀（かめ）



瓦の種類と使用箇所

◆◆瓦の製作◆◆

瓦の製作過程　瓦の製造から葺き上げまでには、土取り、土練り、成型、乾燥、焼成、さらに運搬や燃料の調達など多くの過程があります。

安曇野では、土練りから成型、焼成といった作業は概ね４月から11月末までに行い、粘土が凍みて成型ができなくなる12月から３月は、原料の粘土、燃料の松葉や薪などの調達を行いました。また、乾燥時にかけるムシロやスダレなども１年でだめになってしまうので、冬季に編みました。

土取り　粘土は、近在で調達します。豊科田沢で瓦製造を営んでいた増澤達海さん（1919－2000）によれば、粘土は周辺の田んぼで、検土杖をさすことによって容易に探すことができたそうです。採掘は１ヶ所に４人ほどで入り、採取した粘土は、牛馬や機械力が用いられる前は、オニザルにひもを十字にかけて天秤棒で担いで運んだと言います。

1998年に田沢で行われた町田遺跡（弥生時代）の発掘調査では、瓦粘土を採取した跡が見つかっています。

粘土は、弥生時代の面の上に堆積したものが採掘されています。掘り残した畦が確認できることから、粘土を追って横に掘り進めていくのでなく、一定の範囲を決めていくつも穴を掘って採掘していった様子がうかがえます。

町田遺跡の粘土採掘跡　左：検出面，右：断面

土練り　採掘された粘土は、工場前の野天に置かれます。冬場に土取りをすることは、粘土を凍みかせ風化を促すというメリットもありました。

その後、土打ち師と呼ばれる職人によって必要量がハコに積められ、削り鍬によって、３mmほどの薄さに削られます。粘土に混入している小石などを取り除くためで、２度繰り返されます。そして、フナバという部屋で、瓦の幅をしたタタラという塊に練られます。

成型　タタラから切り出された瓦１枚分の粘土は、工程によってアラジカタ・キリカタ・ミガキカタなどと呼ばれる木型の上でナデイタ、タタキ棒、ヘラやカマなどを用いて成型調整されます。木型さらにヘラやカマは工程や瓦の種類（形）に応じて幾種類もあり、上げ師と呼ばれる熟練した職人が使い分けました。

製造道具の一部

一方、複雑な鬼瓦などは、鬼板師と呼ばれる専門の方が担当しましたが、やがて石膏型でそれぞれの製瓦所で製作されることも多くなりました。

鬼瓦の石膏型

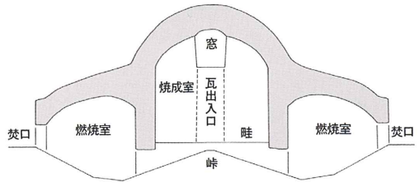
乾燥　アラジと呼ばれる半生状の瓦は、ムシロやスダレなどで風と直射日光を遮って干します。陽に瓦の裏側を向ける干し方をムコウ干し、表側を向ける干し方をタカッパ干しと言い、通常、ムコウ干しで１日、タカッパ干しで１日、ひっくり返してムコウ干し１日の計３日を要しました。また、シラジと呼ばれるある程度乾燥した瓦は、立て掛けて干すこともありました。

乾燥した瓦は、シラジ小屋に積まれました。

アラジの乾燥

◆◆達磨窯の構造◆◆

瓦窯の構造　わが国に瓦が伝わったころの窯は、上ノ山窯群で発見されたような山の斜面を利用した「あな窯」でした。その後「平窯」となり、近・現代の窯は「だるま窯」と呼ばれる地上式の平窯（昇焔窯）に変わります。「だるま窯」という名は、外観が座禅を組んだ達磨に似ているからと言われています。



だるま窯の構造

中央の背の高い部分が瓦を焼く部屋（焼成室）で、その両側のやや低くなった部分が薪を焚く部屋（燃焼室）です。焼成室・燃焼室とも６尺を基準に作られており、窯作りには「六をはなれるな」という教えがあったそうです。

だるま窯（明科東川手 宮川製瓦所）

いぶし瓦特有の銀黒色は焼成の最終段階で、松葉を大量に詰め込んで口を塞ぎ酸素が不十分な状態とすること、すなわち不完全燃焼させて煤を発生させることで得られました。

亜欧堂田善（1748－1822）の「今戸瓦焼図」は、この「いぶし」の工程が写実的に描かれており、窯焚きの様子を知ることができます。

亜欧堂田善「今戸瓦焼図」（神戸市立博物館蔵）
今戸は江戸隅田川西岸の窯場。

焼成　明科東川手の宮川源水さん（昭和９年生まれ）の製瓦所には１基のだるま窯があり、４月から11月末まで瓦を製造しました。天日で瓦を干すため天候にも左右されましたが、１回に1,000枚近く、年間30～40回くらい瓦を焼成したと言います（当時、１棟の屋根を葺くのに必要な瓦は約4,000枚でした）。

この製瓦所では、土打ち師１人、上げ師２人の職人がいましたが、窯焚きは製瓦所の親方である宮川さんの仕事でした。瓦の出し入れには家族が総出で手伝ったと言います。

焼成の手順　瓦の焼成は以下のとおり３日を要しました。

窯に積み込まれた瓦

１日目：昼をめどに、窯の下からシラジ（瓦）を縦横に５・６段積み上げ、いっぱいにする。その後、炭をおこし、弱火で徐々に水分を取る。夕方６時ころ、一旦口をとめてあぶる。

２日目：午前２時ごろ起きて、少量の燃料から焚き始め順次温度を上げて、昼前をめどに1,000度位にする。瓦の焼け具合や縮み具合を見て、大量の松葉を投入してから両方の焚口を塞ぎ火を止める。

燃料は、松葉100束、薪20～30束。

３日目：夕方、窯を開けて瓦を取り出す。中が熱いうちはカナマタを使う。翌日の昼をめどに、次の瓦を積む。

窯の上のほうはよく焼けないため、棟に積んで飾る瓦を詰めるなど、詰め方にも工夫しました。それでも、シロザイと呼ばれる一等品は６割ほどで、失敗することも度々あったそうです。やがて、ガス窯になってからは均一に焼成することができましたが、窯焚きの面白みはなくなってしまったと宮川さんは言います。

窯の造り替え　焼成室の中の瓦を積む畦は傷みやすかったので、畦から地上に出た部分は２・３年に１度作り直されました。窯を築くには、古い窯の壁土や割れた瓦なども再利用されました。

この作業には、４人がかりで１週間ほどかかったそうです。

◆◆瓦の心◆◆

瓦に込められた願い　屋根に据えられたさまざまな意匠。これらは単に飾りとして据えられただけではありませんでした。

例えば、多くの家の屋根（鬼瓦）に認められる「水」の文字が、建物にとって一番の大敵である火事を防ぐための「まじない」であることは、誰もが知っています。同様に、海水を一気に飲み干すと言われる鯱や雨をもたらす雲、龍や蛙なども「火除け」として据えられています。

また、睨みをきかす鬼瓦の鬼面や鍾馗などは「魔除け」として据えられました。鬼面は８世紀代から認めることができ、長い歴史を有しています。一方、おめでたい大黒や恵比寿、さらに鶴・亀などは福を家に招き入れるものとして据えられたのでしょう。

このように、瓦にはさまざまな願いが込められていました。こうした「瓦の心」は、形こそ変わっていますが、最近の屋根でも認めることができます。

波

鶴と亀

◆◆編集後記◆◆

今号は瓦について取り上げてみました。一口に瓦といっても様々な種類や形があり、その歴史や技も含めて、非常に奥深いものがあることを知ることができました。一方で、かつて盛んだった安曇野の製瓦の記憶が急速に失われていることにも気づかされました。記憶を留めそして活かすための努力の必要性を痛感しています。（Y）

◆◆おわりに◆◆

瓦に関係した言葉、慣用句　『広辞苑』（第４版）をひもとくと、瓦に関係する言葉、慣用句として次のようなものが見られます。

瓦（が）　かわら。また、こわれやすくねうちのないもののたとえ。

瓦解（がかい）（屋根瓦の一部が落ちれば、その余勢で他の多くの瓦が崩れ落ちるように）一部の崩れから全体が崩れること。

瓦全（がぜん）　何もしないでいたずらに身の安全を保つこと。

瓦礫（がれき）　瓦と小石。価値のないもののたとえ。

瓦となって全からんより玉となって砕けよ（北斉書）　価値なく生き続けるよりも、価値あることをして死ぬほうがよい。

身近だった瓦　紹介した言葉や慣用句から見る限り、私たちの瓦に対するイメージは、どうも芳しくないようです。でも間違いなく、私たちは長い間、瓦の恩恵を享け続けてきました。こうしたイメージは、それだけ瓦が身近だったことを示しているのかもしれません。

瓦の再評価を　瓦は、建物を護り私たちの暮らしを護り続けてきました。また、安曇野の風土に適い景観にも溶け込んできました。まさにいぶし銀（『広辞苑』によると、渋くて味わいのあるもののたとえ）の働きをした瓦について、私たちはもっともっと評価しなければいけないのではないでしょうか。

時には、屋根を見上げてみてはいかがでしょうか。今まで気がつかなかったいぶし銀の造形を、あちらこちらで発見することができるはずです。

今号編集にあたり次の機関・個人からご協力いただきました。（敬称略）
安曇野市教育委員会 神戸市立博物館 長野県中信瓦事業組合 井口靖公 石曽根榮 小穴桓司 輿友子 谷﨑公威 塚原晃 野口節生 増澤弘繁 宮川源水

編　集　安曇野市豊科郷土博物館
発　行　財団法人豊科文化財団
安曇野市豊科郷土博物館
〒399-8205　長野県安曇野市豊科4289-8
TEL・FAX　0263-72-5672
URL：http://toyohaku.jugem.jp/
発行日　2009年10月24日